

「表象都市 metamorphosis 広島—芸術実験展示プロジェクト2003—」 環境芸術領域からの報告

前 川 義 春

広島市立大学芸術学研究科教授、国際学部教授 武藤三千夫を研究代表者とする「美的文化と環境—21世紀における環境美学の視点から—」の研究に対しここにその報告をおこなう。

この研究においては、平成14年度の研究開始当初より研究の一部として、広島市における芸術実験展示およびシンポジウム「表象都市 metamorphosis 広島—芸術実験展示プロジェクト2003—」の企画が進められ、平成15年秋に開催された。私はこの芸術実験展示の中で「環境芸術領域」のディレクターを務め、作品の制作、展示及びその企画を通して、都市広島の美的文化と環境について考察したため、その報告を中心におこなうこととする。

内容は以下の通りである。

芸術実験展示

- ・期間：平成15年9月27日（土）から10月26日（日）期間中無休
- ・会場：旧日本銀行広島支店（広島市中区袋町5-21）・平和大通り
- ・タイトル：「表象都市 metamorphosis 広島—芸術実験展示プロジェクト2003—」
- ・参加作家：広島市立大学芸術学部教員、大学院芸術学研究科博士後期課程学生、ドイツ・ハノーバー専科大学教員、東京芸術大学教員、京都市立芸術大学教員、金沢美術工芸大学教員、その他著名造形作家等、計20名

シンポジウム

- ・日時：平成15年9月28日（日）13：00～17：30
- ・会場：市民交流プラザ5階 マルチ・メディアセンター（広島市中区袋町6-36）
- ・テーマ：「表象都市 metamorphosis 広島—広島における芸術の意味とその世界性—」
- ・参加者：日本、ドイツ、中国、韓国の各大学教員（美学、哲学、美術史研究者）および芸術実験展示作品制作者

当初、この芸術実験展示「表象都市 metamorphosis 広島—芸術実験展示プロジェクト」は、広島市の中心部に位置する旧日本銀行広島支店のみを会場とし、「絵画領域」と「彫刻領域」からの作品展示を行う予定であった。しかしその後「彫刻領域」が屋内展示と野外展示に分けられ、後者は平和記念公園に隣接する平和大通りの緑地帯に作品を展示することとなり、「環境芸術領域」とした。副題を「平和大通りへの提案—彫刻的視点から—」とし広島市立大学の研究グループが中心となり平和大通りに造形作品を一ヶ月間展示し、広島の都市環境や市民、制作者に与える影響について総合的に研究したものである。

まず「環境芸術領域」の展示目的について述べる。屋内の展示においては、その作品に関わる環境はほぼ一定であるのに対し、野外においては光や気温、人や車の動きなど常に

変化する環境の中に存在することになる。また屋内展示は、空間がヒューマンスケールであるため作品鑑賞に集中できる環境が設定しやすいが、野外においてはヒューマンスケールを超えた自然や建築物を背景に存在することになり、作品のスケール等を含め作品の在り方に大きな違いが生じる。彫刻の主素材である石や金属等、その多くが野外での耐久性にも優れており、他の造形分野には見られない特性でもあるため、それを最大限に生かした多様な都市環境と芸術の関わりを試みたいと考えた。

また旧日本銀行広島支店は昭和11年に建てられ、爆心地から380メートルという近さにも関わらず、昭和45年8月6日の惨劇を乗り越えた、広島の歴史をわたしたちに目で見せ、肌で感じさせてくれる数少ない歴史的建造物である。平成12年7月には日本銀行から広島市に無償貸与され、市の重要文化財でもあるこの建物の有効保存活用をはかるため、文化活動などの利用による暫定活用が開始された。

一方、平和大通りは平和記念公園と隣接し、広島の戦後復興を象徴する通りであるとともに、当初公園として整備された通りであるため、今もなお緑豊かな美しい環境を保っている。平和大通りは平成12年広島市によって、その活用方法も含めたりユニユール案作成を開始したが、その内容に至ってはまだ明確なものとはなっていないようである。私たちは旧日本銀行広島支店とともに、広島市の都市環境に影響の強いこの平和大通りが野外芸術実験展示の場となることを望み、その実例展示をすることにより、平和大通りへの提案とした。

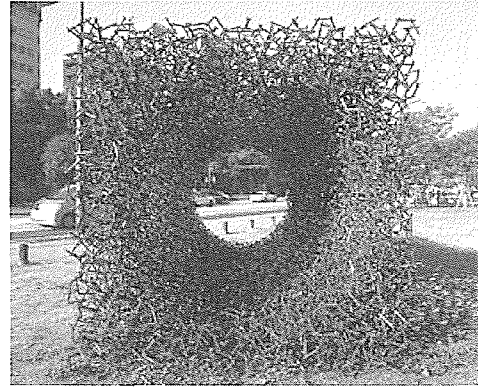
此の度の企画により「環境芸術領域」に展示された作品を、順を追って解説する。

「図1」木村東吾（広島市立大学芸術学研究科博士後期課程在籍）作品名「内包する形状」。1センチ角の棒状の鉄を点で溶接し直方体を造り、その中心部を円筒状の空洞が突き抜けているという構成である。街中に設置されたりチャードセラの作品のように大きな無垢の鉄のかたまりからなる方体は大変強い存在感を持つが、此の作品はそれとは逆で、鉄の持つ別々の特性を生かし、点溶接で構成していくことにより構造的には強いものでありながら、遠目には鉄の実在感は失せ、むしろ軽やかなものにさえ見える。複雑に絡み合う人間の感情の糸のようにも見えてくる。高層ビルを背景に緑の芝生の上に設置された此の作品は、現代の都市に非常に調和しているように見えた。

また一方で此の作品はたいへん人目を引く物であり、また親しみの持てる造形物に仕上がっているため多くの人が近寄り、手で触りそして公園の中の遊具でもあるかのように円筒の中をくぐり抜けようとする。しかし鉄の鋭利なエッジが無数に露出しており、見た目とは裏腹に大変危険なものでもある。展覧会開催の数日後には市からの要請もあり、作品の周囲に人止めとして、高さ60センチほどの柵をもうけなければならなかった。此の作品のパブリックな場における一つの課題である。

「図2」加納士朗（広島市立大学芸術学部ティーチングアシスタント）作品名「Untitled」。アフリカ産黒御影石による三つの石からなる作品。「図1」の作品とは対照的に実在感のあるどっしりとした重厚な作品である。現代都市では建築物においても、ガラスを多用し薄い手すりを使用するなど、出来る限り軽やかで実在感を消そうとするのが主流のようである。しかし私個人は、豊かな環境とは高度な両極の調和の中におこる緊迫した関係の中に生まれると考えている。上記の二人が大学で同じ時を過ごしながら、対

照的な指向性を持ち、奇しくも道を隔てて作品を対峙させた。此の二つの作品を同時に見るとき、一方の作品があることによりもう一方がより美しく存在できる、そのような関係も出来つつあると感じた。



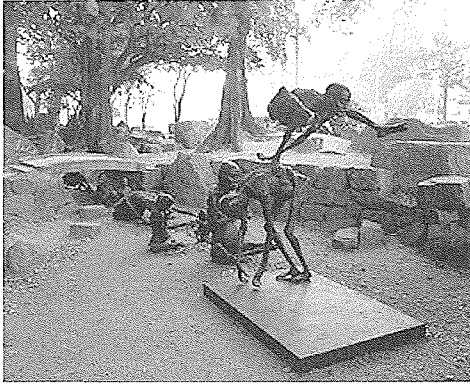
「図1」 木村東吾 作品名「内包する形状」



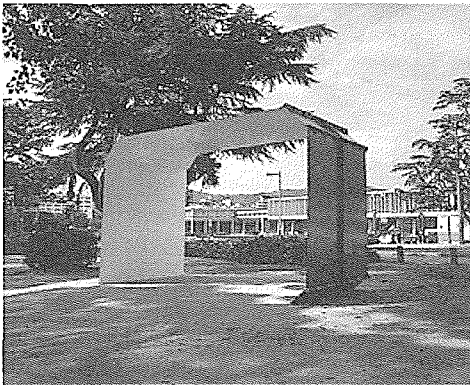
「図2」 加納士朗 作品名「Untitled」

「図3」 和田拓治郎（広島市立大学芸術学部助手）作品名「出世街道」。作者は学部時代から人間の心の中に巣食う様々な煩惱を、餓鬼の姿を借りて表現してきた。此の作品は広島市の天然記念物でもある旧国泰寺愛宕池の中に設置されたが、作者は当初、愛宕池に隣接する白神社の境内に展示したいと考えていた。しかし残念ながらその計画は白神社の秋祭りと重なり叶わなかった。神聖な領域にあえて煩惱の化身をおき、両者を際立たせ、鑑賞者自らの内面を顧みてもらおうと言う趣向である。

会期中此の作品に市民の方から数件の投書が寄せられた。此の界隈を生活圏としておられる方々で、毎日の生活の中で此の作品を幾度も目することを避けたいというのである。原爆の惨劇の中、焼けこげた体を池の中に沈めている人々の映像と重なるのであろうか、または芸術作品は見た目心地よく、美しいものでなければならないという考えなのか？ 作者と私は作品や展覧会の意図を理解していただけるよう根気強く対応を続けた。

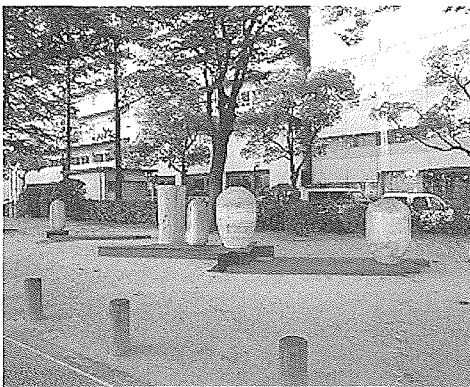


「図3」和田拓治郎 作品名「出世街道」



「図4」吉田樹人 作品名「cave」

吉田樹人（広島市立大学芸術学研究科博士後期課程在籍）作品名「cave」。此の作者はデザイン専攻空間造形領域の研究を続けてきた学生である。この他の野外展示に参加した作者は全員彫刻領域の研究をしてきた者たちであり、対象を量（塊）として捉え、素材を量として表現することが多いが、此の作者は工業製品である鉄板の素材性をそのままに、線や面を生かし構成した。作者の日常生活の中でよく通るトンネル（地下道）をモチーフにその一部を剥ぎ取った形でここに提示したが、白くウレタン塗装を施した内部と鉄生地そのままの外面がつくりだす凜とした空気は、都市の中に新鮮な空間を創り上げていた。



「図5」江田ゆかり 作品名「Tolerance」

「図5」江田ゆかり（広島市立大学芸術学研究科博士後期課程在籍）作品名「Tolerance」。参加者20名の内、唯一の女性である。石、木、鉄材を細やかに組み合わせ構成している。題名通り包容力のあるのびやかな作品が、都市の中で適度な緊張感とともに心地よい空間を作っている。一つ一つの部品はすべて左右対称形であり、制作は型紙と

定規をたよりに日々忍耐強く進められた。木と石により同形のもので造られ、それぞれの素材感が作品に微妙な変化を与えている。そして最後に作者によって全体の構成、配置が決定される。鋼材により高低差を与えられ、直行して配置され、また間をおかれて展示されることにより各部分が独立した存在感と役割を持ちながらも全体の関係性が構築され、作者の細やかな空間作りの配慮が感じられる。

「図6」前川義春（広島市立大学芸術学部助教授）作品名「穿孔Ⅰ」「穿孔Ⅱ」。広島県倉橋島の丁場から切り出された御影石を、工業ダイヤモンドのコアドリルで石の左右から三分の一の深さまで穿孔し、外側から鉄のくさび（矢）を入れて分割し構成した作品。自然石の荒々しい表面と工業的加工によって出来た滑らかで人工的な石の表面を対局として造り出し調和させた。形態を造るのではなく作品を状態として存在させることで、力強い空間を都市の中の森に出現させたかった。

以上6作家7点が此の度の芸術実験展示「表象都市 metamorphosis 広島—芸術実験展示プロジェクト2003—」における「環境芸術領域」の作品として展示された。先にも述べたように野外に彫刻作品を展示するには、変化の激しい環境、ヒューマンスケールを超えた自然や都市環境の中に置かれるため、強い存在感が必要となってくる。各作家ともそれに対応するための理想とするプランを持っていたが、資金や時間の関係もあり十分には実行できなかったとも聞いているが、限られた条件の中精一杯の制作、展示をしてくれたことに心から感謝している。



「図6」前川義春 作品名 左：「穿孔Ⅰ」 右：「穿孔Ⅱ」

今回「彫刻領域」への出品作家として広島以外からお招きした方々は、国内外の屋内、野外の展覧会等で目覚ましい活動をされており、これらの作品を是非広島の方々にも見ていただきたいと考えたためと、またこれらの作家たちが広島をどのように見、如何に表現してくるのか、研究グループとしても大変興味があり出品していただいた。当初、この内の半数は野外に展示していただけたらと考えていたが、野外に耐えうる大型の作品を運搬するなどの経費を主催者側で十分にまかなうことが出来ず、全員が旧日本銀行内での展示となってしまった。

しかし芸術が都市環境に影響を及ぼすとすれば、野外における芸術活動は今後の重要な研究分野の一つであり、むしろこの機会を地元のソフトの育成、鍛錬の場と考え、若手作

家である本学の助手、博士課程学生に「環境芸術領域」の作家として参加してもらった。

「環境芸術領域」の企画を進めていた頃、彫刻家イサム ノグチが戦後間もない1951-52年に平和記念公園への東西からの導入口として設計した、平和大通りに架かる2つの橋、「平和大橋」、「西平和大橋」の架け替え問題が浮上していた。私たち研究グループも同じ彫刻家として大変興味があり、平和大通りの全体的リニューアル案を含めた橋の架け替え問題を考える市民団体や、ニューヨークにあるイサム ノグチ財団専務理事のジョージ サダオ氏、広島市の関係各所と懇談をする機会を得、その中で都市環境と芸術、歴史性と現代など様々な観点からの意見交換をおこなってきた。広島市によって進められている平和大通りのリニューアル案や橋の架け替え問題は現在もお続行中であり、私たち研究グループは「平和大通りを野外芸術実験展示の場とする」という提案を含め、此の度の研究テーマの一つとして今後も関わっていきたいと考えている。

実験展示を終えて今思うことは、平和記念館や原爆ドームに対峙し作品展示をしようとする時、あまりにも耐え難く重い感覚に捕らわれることである。作品はかつて世界に類を見ない悲惨な歴史の前でその存在の意味を問われるであろうし、また人為的な負の痕跡は私たちに人間の在り方そのものを問いただしてくる。この命題はあまりにも重く、大きなものであるが、私たちはこれを避けて通るのではなく、正面から答えていかねばならないのだろう。

ドイツ、カッセルドクメンタや、イタリア、ベネチアビエンナーレという伝統ある国際芸術展を見る時、広島こそはこれらと同じくらい、いやそれ以上に国際的芸術創造の場として必然性が在り、重要な場ではないかと考えている。

(2005年1月15日)